

彰表農業町光

として農業者



卓越した農業者として、大木信夫さん他三名の方に光町農業賞が贈られました。

なお、表彰式は二月十七日、公民館で行われ、四人の方がそれぞれの体験を発表しました。

大木信夫さん(二又二二七)

は水稻、養豚、露地野菜を主として経営し、地域の農業後継者グループのリーダーシップであります。また、継友会長として活躍されています。

〔大木信夫さんの体験発表〕

昭和四十一年に親子契約推進事業というのが、前椎名町長さんの力で、「嫁に行くなら光町、婿に行くなら光町」ということで発想され、十年目を迎えました。

農業を取り巻く情勢が、目まぐるしく変化する中で、産業課、農協、八日市場農業改良普及所の先生方のご指導を受けまして、私たちは農業経営に意欲を燃やしているものであります。

親子契約の推進事業の中に、小使い契約、月給契約、歩合契約、部間契約、譲渡契約の五つの種類があります。

親子契約も、両親が仕事を出来るうちは、契約を結んでも別に差し支えないと思いますが、両親がだんだん年をとってくるにつれて、また、私もある程度年をとって来ると、一つの部間経営だけを一生懸命やっていくというわけには、どうしてもいえないと思います。

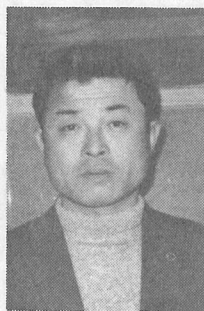
私も露地野菜と養豚の部間契約をしているんですけど、最近ではそればかりをやっていくわけにはい

—306—

かなくなって、一般経営というふうになってきています。

山崎文武さん(台一六二二)は水稻+養豚を主として経営し、台部落の高度集団栽培事業の設立及びリーダーであります。

また、農協園芸部南条支部長として活躍されています。



〔山崎文武さんの体験発表〕

私が養豚を始めたのは、昭和四十四年です。

当時、農協南条支所では、養豚推進方式というのを打ち出して、一〇〇頭から二〇〇頭くらい収容出来る豚舎を近代資金によって建て、私もその組合員に入りまして六十坪ほどの肉豚舎を建てました。現在までは、全農の肉用子豚生産団地による種豚導入事業で行いました種豚十頭と合わせて進んでいます。

で、養豚経営も今は、ちよつとばかり相場に助けられているような状態ですが、名前のとおりいつも豚々でございまして、自分の体が豚臭くなるのが、もうけくらのものです。

収支の方は別として、私が

養豚をやっている中で、一番考えていることを述べてみたいと思います。

ふん尿の処理の問題です。私が現在行っている処理方法は、山の中へ三畝くらいの穴を掘りましてそこへU字溝で結び、水で流し込むという方法をとっております。

が、稲作、野菜づくりにおいてわれわれが本当にほしいものは、有機質でございます。二、三年前から農業委員会などで土づくり運動を呼びかけているようですが、なかなか調子が出ないようござ

います。

また、谷中園芸組合設立発起人で、同組合長を勤め、青少年相談員として活躍されています。



〔平山和敏さんの体験発表〕

私は、二、三年農業をしているうちに水田には米をつくり、畑にはとにかくもつと商品価値のある野菜を上手に利用してつくったならいいじゃないかと思ひ、露地で手取り早く出来るネギ、ニンジン、トマトなど、いろいろ試作し

います。

そこで私は、隣の横芝町で国の補助事業などで作った大型ハウスの中でかくはんして乾燥させている処理方法を見たんですが、そのミニ版ともいえますが、その方式を取り入れていこうと思って整地をしまして、ハウスを建て、かくはん装置を入れて蒸散浸透方式という処理方法を作つて、二十%程度の水分を取り除き、それをハウスへ流し込んで乾燥させ、田畑へ還元する方法で行きたいと思っています。

てみました。しかし、技術や知識販売方法などがない私でしたのでいずれもたいした成果が上がりず失敗いたしました。

それからは参考書を読んだり、先進地を見学したり、あるいは講習会などに極力参加いたしました。わずかながらもだんだんと知識を得ていきました。

そして三十五年、近所の若い仲間と、「スイカをつくつて皆んなで東京に出してみないか」と、話を持ちかけた結果、早速翌年に⑤スイカ組合を結成しまして共選共販、共計を建前にしまして、春に一人当りだいたい八畝から一反歩くらいの面積で始まりました。その時の栽培用式は、パラフィン紙によるポットキャップ栽培の

〈次ページ上段へ〉